「色。赤と青」

小南英昭

「Color」

Hideaki KOMINAMI

作品を制作する上で構成のエレメントとなるものは、色彩、平面、立体、空間、素材、時間、音、などがあげられ、そのエレメントを使用して表現者は自分の思想を伝達する。いわゆる芸術の領域であれば、平面＝絵画、立体＝彫刻、音＝音楽。デザイン領域であれば、平面＝ヴィジュアル、立体＝プロダクト、空間＝建築、時間＝映像となる。この表現領域のツールとして共通するものの中に、最も視覚的に影響力があると言われているものが「色」である。色には形で表すことが出来ない感情や思いを表現することや、言葉以上に微妙な心理状態をコミュニケーションすることに優れているツールである。

しかしながら、「色」に対する思いは千差万別、人や文化によっても異なる。だが色に対しての一般的なイメージを言葉に置き換えることは可能である。

ここでは日本人の一般的な色に対するイメージをあげてみる。

「赤」情熱、生命、愛、革命、歓喜、活動的
「黄」陽気、元気、楽しい、発展、知性、光
「緑」自然、安らぎ、希望、安定、若々し
「青」協力、調和、忠実、理想、落ち着き
「紫」神秘、高貴、上品、貴賓、病気、涙
「白」平和、清潔、純粋、真実、公正、無邪気
「灰」憂鬱、不安、孤独、退屈、老年、曖昧
「黒」厳正、心配、悲惨、悲しみ、死滅

上記のようにある程度「色」に対するイメージを分類することは出来るが、決してこの言葉が「絶対」ということは言えない。見る人の心理状態、環境、または配色によってもイメージは変化する。しかしながら、この例から見ても分かるように「色」に感情や心理状態を込めることは可能である。

色は一般的に750万～1,000万色あると言われ、その内の約750万色を人間は見分けることが出来ると言われている。私はこの何万色と言われる色の中から、その時の心理にあう色を選び出し、色と色を交わらせることによって、色の「はざま」を作り、その「間」に私の思想を込めて作品を描いている。

しかし、色だけを使って表現するということは、微妙な心理状態を表現できるとともに、見る人によって表現者のメッセージが変化することにもなる。時にして私の思いとは違う感じ方で作品を見られることがあるが、それはやはり色がその人の心理状態、時代、環境、等に非常に左右されやすいからである。

ここでは個展会場で感じたことをあげてみる。
前文の色のイメージにもあるように、社会に活気がある時は社会を色に例えると、「赤系統」にイメージすることが出来る。このような状況の時は、反対に気持ちにゆとりを求める傾向が強く感じられ、「青系統」（作品①）に引きつけられる人達が多い。また、現在のように先行きがわからない時代では、気持ちに活気、元気を求める傾向が強く感じられ、「赤系統」（作品②）に引きつけられる人達が多い。また、性別の違いで視ると、女性は「赤系統」に興味を示す傾向が強く感じられ、その反面男性は２つの色相を対比させた色の組合せや「青系統」に目を引かれる傾向が強く感じられた。（作品③/④）

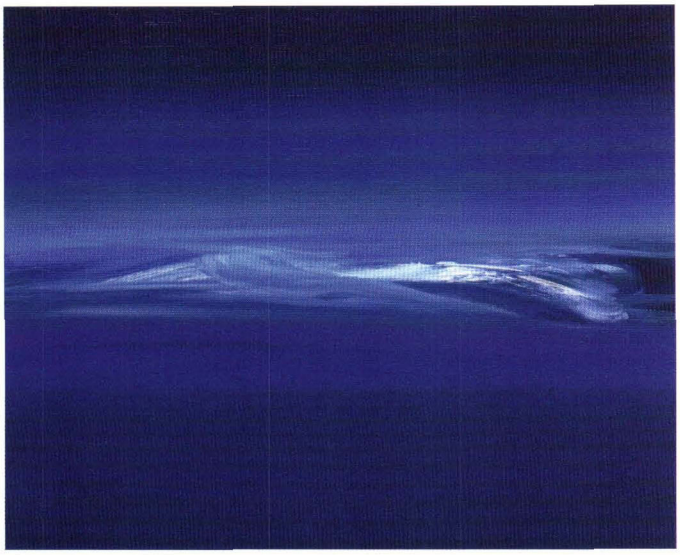
このことは私の個展で感じたものであり、すべての人にあてはまるとは限らないが、非常に興味深い出来事であると感じている。

最後に絵を描くということは表現技術を磨くということでもあるが、それよりも描く表現者の思想を確立することが重要であると私は考える。

「色。赤と青」

小南英昭

「Color」
hideaki kominami

① 500 mm×606 mm
② 500 mm×606 mm
③ 500 mm×606 mm
④ 606 mm×606 mm

①	
②	
③	④